



# SFTSウイルス感染経験後の 院内感染対策

宮崎県小動物臨床 奥山寛子

# 当院における動物のSFTSウイルス感染 (2018-2019)

- ▶ 2018年3月～12月⇒ 6例（ネコ）  
2019年1月～11月⇒ 8例（ネコ：6例、イヌ：2例）
- ▶ 初期症状：40℃以上の発熱、食欲不振、活力低下、  
嘔吐、黄疸、眼結膜の充血、出血性下痢（2例）  
白血球および血小板の減少
- ▶ ダニの存在：3/14（吸血、付着、室内に落下）
- ▶ 生存率：7/14（50%）
- ▶ 同居動物の感染または感染疑いの認められたもの：5/14（40%）
- ▶ いずれも飼い主家族の感染および体調不良は認めず



# 感染源症例（2018-5例目）

- ▶ 初診日 : 別の獣医師が担当
- ▶ 主訴 : 4日前から食欲がない、ずっと吐いている
- ▶ 臨床症状 : 発熱40.4℃、黄疸、白血球および血小板の減少  
尿検査で潜血およびビリルビン反応  
    ➡室内にダニが落ちていたことから、SFTS感染を疑う  
    宮崎大学にSFTSウイルス検査を依頼
- ▶ 隔離室にて入院治療を開始

# 感染源ネコとの接触状況

- ▶ 第2病日：治療後に補液の穿刺部位から補液剤とともに出血。  
ネコの身体が濡れ、周囲に液体が飛散 → 看護師と拭き取り作業を行う  
【感染対策】 獣医師→グローブ 看護師→グローブ、マスク
- ▶ 第3病日：症例は回復の見込み低下。飼い主の希望により退院。自宅にて死亡。
- ▶ SFTSウイルス検査結果：PCR陽性
- ▶ 症例は衰弱しており咬む、引っ掻くなどの抵抗なし。  
治療の前後で、治療スタッフにマダニによる刺咬は認めず。

# 獣医師（演者）のSFTS発症と経過（1）

- ▶ 発症初日：発症ネコとの接触から8日目 全身の筋肉痛、倦怠感
- ▶ 発症3日目：悪寒、激しい倦怠感、発熱38℃、眼球痛、関節痛  
（※咽頭痛や咳、鼻漏などの風邪症状はなし）
  - ・ SFTSを懸念し、夜間救急病院を受診
  - ➡白血球および血小板の減少からSFTSウイルス感染が疑われる
- ▶ 発症4日目：高次医療機関に転院し、10日間入院
- ▶ PCR検査：入院1日目、2日目は陰性、3日目以降陽性

# 動物看護師のSFTS発症と経過

- ▶ 獣医師（演者）の入院翌日に発熱（38℃）、倦怠感、背部痛、頭痛、めまいを訴え、高次医療機関を受診
- ▶ 白血球数・血小板数の減少は認められず、翌日には解熱。背部痛、倦怠感は約1週間続き、その後回復
- ▶ 発症から14日目にペア血清でSFTSウイルスに対する抗体価上昇を確認

# 感染要因

## ▶ 感染防御に対する認識の甘さ

初期には感染防御に注意していたが、診断機会が増加しても  
飼い主家族、スタッフへの感染がみられなかったため、  
警戒心が希薄になり、防御具の装備が甘くなっていった

# ウイルスの侵入経路

- ▶ 看護師はマスク、グローブを着用していたにも関わらず感染
  - ▶ 演者（獣医師）と看護師の両方が感染
  - ▶ 皮下注射部位から漏出した血液を含む補液剤でネコの身体が濡れており、液体が周囲に飛散していた
- ➡ 身体が濡れたことに不快を感じたネコが身震いし、液体が飛び散っているところへ、私と看護師が狭い隔離室へ入り、拭き取り作業中に呼吸器や眼結膜などからウイルスが侵入した可能性があると考え

## 演者が回復した要因

- ▶ SFTS症例に接触した自覚があり、発症初期に医療機関を受診した
- ▶ 医獣連携のもと、初診時からSFTSを念頭に置いた対応がとられた
- ▶ 死亡率が上昇する年齢よりも若齢で、体力、免疫力があつた

# 当院における院内感染対策（1）

## ◆感染防御具

- ・動物は治療時に抵抗し、咬む、引っ掻く危険性がある。
- ・動物は身震いするため体液の飛散が起こり易く、呼吸器や眼、口腔粘膜から感染する危険性がある。

- ガウン : ビニール製ガウンは破損しやすい。不織布などの厚めのガウンが望ましい。  
ポリエチレンラミネート加工が施してあり防護力の強化されている不織布ガウンを使用。
- グローブ : 二重装着が望ましいが、作業はしにくい。
- ゴーグル : フェイスシールドよりゴーグルが望ましいが、装着に抵抗があり、曇るなど作業困難。  
ガード付き保護メガネなどを使用。
- マスク : 飛沫感染対策には不可欠。



## 当院における院内感染対策（2）

### ◆ 個人防護具を着用するタイミング

- 稟告、症状からSFTS感染が疑われる場合 → まずグローブ、マスクを装着して診察
- 疑いの強い症例は採血時から、血液検査結果からSFTS疑いが濃厚となった時点  
→ ガウン、ゴーグル（フェイスシールド、保護用メガネ）まで装着して検査、治療

### ◆ 個人防護具の着用にあたり、飼い主に説明

→ 過度な動揺・不快感を与えないよう配慮

### ◆ なるべく経験豊富なスタッフにて、最少人数で対応

## 当院における院内感染対策（3）

- ◆ 治療して救える命は救いたいが、スタッフの感染は怖い。
- ◆ 治療の際は、基本的には獣医師一人が感染防護具を着用して実施。  
キャリーやケージ内で治療するなど、接触を最低限にすることに留意。  
静脈注射は避け、筋・皮下注射の際にはなるべく細い注射針を使用し、  
出血などの体液暴露を避けるよう注意。
- ◆ 消毒：1%ビルコン、70%エタノール

飼い主様へ

( ) ちゃんは、SFTS（重症熱性血小板減少症候群）の疑いがあります。  
SFTSは人獣共通感染症で、感染している犬猫からヒトや同居の動物へ感染することがあります。

- ウイルスは感染動物の血液、唾液、糞、尿、涙などの体液に含まれ、約2～3週間排泄されます。  
感染の疑いのある動物はケージなどで隔離飼育し、接触は最低限にするよう注意して下さい。
- 感染疑いの動物に触る場合や、血液、唾液、糞、尿などの取扱いの際は、手袋、マスク、予防衣、ゴーグル（眼鏡）を着用して下さい。
- 院内感染予防のため、隔離室にて治療します。病院に到着されましたら、まずお電話下さい。  
治療の準備が整い次第、スタッフをご案内いたします。  
治療時にスタッフは感染防護具（ガウン、手袋、マスク、ゴーグル）を装着しますことご了承下さい。
- 万が一、この疾患で動物が死亡した際
  - ・火葬する場合⇒必ず動物火葬業者にSFTSで治療中であったことを申告して下さい。  
業者の方も直接触ることのないようにお伝えください
  - ・埋葬する場合⇒新聞紙や布にくるみ、他の動物が掘り起こさなように深く埋めて下さい。

#### ヒトの初期症状

発熱、消化器症状（食欲低下、嘔気、嘔吐、下痢、腹痛）、頭痛、筋肉痛、  
神経症状（意識障害、けいれん）  
※高齢の方ほど重症化する傾向にあります。

潜伏期間は6～14日です。飼育動物に体調不良がみられた後、2週間以内に飼い主様ご家族に体調不調を感じられた場合は、  
早めに医療機関を受診して下さい。

受診の際は、飼育されている動物がSFTSに感染している疑いがある、または治療歴がある事を必ず医師に伝えて下さい。

あらかじめ医療機関にお電話で状況をご連絡された上で、受診されることをお勧めします。

また、同居の動物に同様の症状がみられた際は、当院にご連絡頂き、早めにご来院下さい。

---

#### 医療機関様

( ) 様の伴侶動物を、SFTS（疑い・陽性）で治療しています。

治療期間： 年 月 日 ～ 月 日

飼い主様ご家族に体調不良がみられる際は、医療機関を受診されるようお伝えしておりますので、宜しくお願ひ致します。

# 動物からの感染防止には・・・

- ▶ 動物のSFTS症状を把握しておく
  - ➡ 早期に診断し、適切な感染防止対策を行うことが重要
- ▶ 飼い主に対する啓蒙
  - ➡ SFTSの概要、マダニに対する通年予防の必要性

